# 今甦（よみがえ）る音楽都市こおりやまへの熱い想い

## ～市民の力がまちを変えた～

## 合唱

「合唱王国ふくしま」。このフレーズを皆さんも耳にしたことがあるのではないでしょうか。

昨年の10月から11月にかけて行われた「全日本合唱フェスティバル　第58回全日本合唱コンクール全国大会」では、福島県勢10団体が金賞を受賞し、過去最多の受賞数となりました。

そして、この「合唱王国ふくしま」の輝かしい栄光を支えているのは、私たちのまち「こおりやま」です。同大会には、市内の中学校・高校・大学から5つの団体が出場し、4団体が金賞を受賞しました。

また、合唱のほか、合奏や個人演奏においても、多くの団体や個人の方が全国大会に出場し、素晴（すば）らしい成績を収めています。

かつて「東北のウィーン」と称され、「音楽都市こおりやま」としての名声を得た背景には、人々のどのような想いがあったのでしょうか。

26年連続27回目の金賞

**安積黎明高等学校合唱団**
全日本合唱コンクール（金賞、広島県知事賞）

3年連続日本一

**郡山第二中学校合唱部**
全日本合唱コンクール（金賞、文部科学大臣奨励賞）

**郡山第一中学校合唱部**
全日本合唱コンクール（金賞）

# 今甦る

## 個人

真田理美さん（郡山ザベリオ学園小学校1年）
ピティナ・ピアノコンペティション
ほか＜ピアノ＞

柳沼佑哉さん（安積第一小学校1年）
フリューゲル・ピアノ・コンチェルト・フェスティバル＜ピアノ＞

菅原由佳さん（開成小学校4年）
日本クラシック音楽コンクール（入選）＜ピアノ＞

平井里瑚さん（桜小学校5年）
ピティナ・ピアノコンペティション＜ピアノ＞

清野ひかりさん（郡山女子大附属高等学校2年）
日本クラシック音楽コンクール（4位入賞）ほか＜サックス＞

吉田麻美さん（郡山第七中学校3年）
日本クラシック音楽コンクール（入選）＜クラリネット＞

## 全国大会出場の団体や個人がこんなにも…

## 合奏etc.

**郡山女子大学開成の杜女声合唱団**
全日本合唱コンクール（金賞）

**安積黎明高等学校クラシック部**
全国学校合奏コンクール（奨励賞）

**郡山第二中学校管弦楽部**
全国学校合奏コンクール（優秀賞）ほか

**郡山第七中学校合唱部**
全日本合唱コンクール（銅賞）

**安子島小学校特設音楽部**
こども音楽コンクール

**郡山女子大学附属高等学校マーチングバンド部**
マーチングバンド・バトントワーリング全国大会（銀賞）

**郡山女声合唱団**
全日本おかあさんコーラス全国大会（おかあさんコーラス賞）

# 音楽都市への歩み

**戦災復興を契機に高まった 音楽への熱意が全国へ…**

NHK交響楽団公演（昭和29年、国鉄郡山工場大食堂）

## 戦後の郡山 ～荒廃と復興、そして音楽都市の産声～

敗戦直後の郡山は、空襲による爪あとや産業の荒廃、そして食糧危機など、市民の衣・食・住を脅かす、かつてないほどの困窮（こんきゅう）の時代を迎えていました。

こうした中、市民は、持ち前の開拓者精神で戦災復興への道を一歩ずつ歩み始めたのですが、戦前から工業都市として人口が急増し、さまざまな人々が集まったことから、暴力団抗争などが相次いで起こり、後年、「東北のシカゴ」といった異名が全国に広まってしまいました。

一方、言論・集会・結社に関わる表現の自由の風潮から、全国的に文化団体の結成が相次ぎ、郡山にも、美術・演劇・音楽などの団体が結成されました。

また、この時期には、「素人のど自慢大会」などが人気を集め、郡山でも町内会の演芸会等に多くの人々が参加し、開放的な音楽を楽しむようになりました。

こうした時代に郡山の音楽活動は盛んになり、戦災復興を目指す市民の心の拠（よ）りどころとなったのです。

## 音楽によるまちづくり ～東北のウィーンへ～

ドンコザック合唱団（昭和31年）
～国鉄食堂ではN響以外の公演も…～

昭和26年12月、郡山市公会堂で開催された「クリスマス音楽会」は、主催した郡山音楽協会のメンバーに「きっと郡山に音楽は根ざす」との大きな自信を与えました。この音楽会は、午後6時半から始まり、11時半までの長時間に及んだにも関わらず、聴衆は誰一人帰ることがなかったのです。

そしてこの自信は、本格的なオーケストラの演奏会を開きたいという想いに変わり、昭和29年、一大決意のもと、「NHK交響楽団公演」が開催されました。

会場は、国鉄郡山工場大食堂。主催者であった郡山音楽協会と郡山青年文化協会のメンバーは、食堂の当日完全復帰という厳しい条件を受け入れ、縁の下の働きでこれを実現させたのです。

このNHK交響楽団を迎えての演奏会は、市民に音楽的な感動を与える一方で、音楽関係者に、音楽のまちづくりに対する責任感をもたらしました。

それまでの音楽会は、東北地方では仙台と福島といわれてきましたが、これを機会に「音楽（文化）の途中下車」という合言葉が起こり、後に称されるようになった「東北のウィーン」の素地ができたのです。

## 市民会館の完成 ～市民の熱意で夢実現～

郡山を訪れた作家の中野好夫は、「新・日本拝見」（週刊朝日昭和32年4月号）で郡山について次のように記しています。

**「…音楽・演劇も盛んだ。海外音楽家の演奏会や、高級新劇なども催されるのは、たいてい福島ではなく郡山らしい。国鉄工機部合唱団などもどうして見事なものであった。職場と音楽が一つになっているのがよい。（ただし、不思議なことにそれだけの会場は市にない）」**

この評価は、当時の郡山の文化を知る指針といえますが、特に末尾の記述は、音楽団体や市民の熱意を伺い知ることのでき

る一文ではないでしょうか。

こうした市民の文化活動は、世論や市当局を動かし、市民からの寄附を募る「愛市運動」にも結びつきました。そして、昭和33年10月に完成したのが東北一の設備を誇る「市民会館」だったのです。

完成後間もない11月には、「第11回全日本合唱コンクール」が開催され、全国から多数の合唱団が来郡し、郡山の名を全国に一層広めることになりました。

市民の熱意で完成した「市民会館」

## 合唱・器楽・学校音楽 ～水を得た音楽都市～

**【合唱】**

合唱団の活動は、昭和28年から始められた「合唱まつり」（郡山音協）などにより盛り上がりを見せ、前述した郡山での全日本合唱コンクールでは、国鉄郡山工場合唱団が、東北代表として出場し、堂々の3位に入賞しました。

このコンクール開催は、福島県内の合唱運動にも影響を与え、昭和41年には、県内の代表を集めた「福島県おかあさん合唱連盟」が結成され、持ち回りでの合唱祭開催など、全国からも認められる活動を続け、「合唱王国ふくしま」の基盤を築きました。

**【器楽】**

器楽活動では、昭和20年代後半頃から、個々のグループが演奏会などを開催していましたが、当初は弦楽合奏を中心とした親睦的な雰囲気の活動でした。

その後、いくつかのグループは、管・打楽器を加えて統合し、現在の「郡山市民オーケストラ」へと発展するとともに、毎年、さまざまな演奏会などを開催することになりました。こうした活動が郡山の音楽の幅を広げ、「音楽都市こおりやま」の一翼を担っているのです。

**【学校音楽】**

学校音楽活動は、昭和36年、全国器楽合奏コンクールにおいて金透小学校が第1位となり、翌年も連続受賞し、文部大臣賞に輝きました。当時の佐藤勝海校長は、これを受け、次のように語っています。

**「金透小には従前から音楽教育の素地ができていた。子どもの情操を純化し、文化都市づくりの一環として音楽教育を推進しようという心構えをもって実践した」**

こうした学校音楽活動の成果は、合唱や合奏などの各部門で引き継がれ、小・中・高校などにおいて、毎年すばらしい成果を残すことになりました。

## 変化したまちのイメージ！ ～シカゴからウィーン、そして音楽都市へ～

郡山では、各分野での音楽活動や〝良い音楽を安く多くの人に〟とのスローガンのもとで進められた勤労者音楽協議会（労音）の企画などにより、市民会館を会場とした著名団体の公演や世界的な音楽会が続き、地方都市には珍しい動きとしてマスコミの注目を集めました。

そして、週刊誌などに掲載されたタイトルが、

**「東北のシカゴから**
**東北のウィーンへ」**
**「音楽都市郡山」…**

だったのです。

この中の一つ、『週刊朝日』の記事（昭和36年5月のゲバントハウスオーケストラ公演）の一部を紹介します。

**「…郡山市の人口は10万人ちょっと、興業の常識からは千人どまりがいいところだが、入場者はその倍を上回った。それもA券二千円、最低のD券にしたところで八百円、地方都市じゃ決して安くない。全く奇跡といいたいところだ。だが、郡山市では不思議でもなんでもない。〝東北のウィーンだからな〟とは少々キザだが、とにかく音楽都市なのである」**

## 音楽によるまちづくり ～今考えることは…～

戦後の郡山の音楽活動は、昭和39年の「十万人コーラス」運動へと発展しました。これは、毎月第3金曜日をコーラス日とし、街頭で市民とコーラスを歌い、広めるというものでした。

また、昭和40年には郡山市と安積郡の合併を契機に、「二十万人コーラス」と改称し、「二十万人コーラス市内パレード」なども実施されました。

これらの活動は、東宝映画から注目され、暴力のまちから音楽のまちへと生まれ変わる姿を描いた**「百万人の大合唱」**として映画化され、郡山のイメージアップに大きく貢献したのです。

郡山における音楽運動は、こうしたことからも「まちづくり運動」の一環であったと考えて良いのではないでしょうか。

残念なことに、「二十万人コーラス運動」への気運は、テレビの普及などの市民生活の変化により影を潜めることになりましたが、音楽によるまちづくりの精神は、今も市民の皆さんの心に息づいているのです。

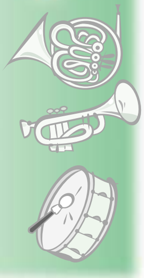
映画「百万人の大合唱」

二十万人コーラス（麓山公園）

〈参考図書〉郡山の歴史、郡山文化40年のあゆみ（郡山市文化団体連絡協議会）
郡山市音楽連盟30周年記念誌（郡山市音楽連盟）
〈写真提供〉鈴木武司さん

# 音楽都市へのメッセージ

まちづくり運動の一環として進められてきた郡山の音楽都市への道のりは、すばらしい成果をもたらしましたが、音楽都市としてさらに飛躍するためには、どのような取り組みが必要なのでしょうか。今回は3人の皆さんにお話しを伺いました。



## 心に響くハーモニーを奏でたい

**鈴木　武司さん**
郡山市文化団体連絡協議会会長
郡山市音楽連盟会長

**【紹介】**
鈴木さんは、50年以上の期間にわたり、郡山で音楽によるまちづくりを実践し、牽引してきました。

楽曲がリズムとメロディーの2つでハーモニー（協調）を奏でるように、演奏会は演奏者と観客の双方があってこそ初めて成り立ちます。演奏者は作曲者の意図と観客の気持ちを大切に演奏し、観客は拍手で演奏者に力を与え、すばらしい音楽になるのです。

私は、音楽の専門家ではありませんが、人生のテーマを音楽に置いたのは、音楽が天の声に感じたからです。赤ちゃんが、母親の子守唄で安らぐように、外国の人たちと音楽で時間を共有するように、音楽には、心に通う言葉があるように思えます。

「音楽都市こおりやま」。これは決してコンクールで優秀な成績を残すためのものではなく、郡山のまちづくり・人づくりの主題なのではないでしょうか。

演奏会での演奏者と観客のように、音楽のまちづくりには、市民と行政がお互いの心に響くハーモニーを奏でなければなりません。

戦後60年が過ぎ、コンクールで素晴らしい成績を残している今だからこそ、演奏者と観客、そして市民と行政が一緒になって、このまちを音楽で満たし、ここに住む人、訪れる人を音楽でやわらかく包み込み、長く心に残るまちにしたいものです。

**大疑は大進すべし。**
**小疑は小進すべし。**
**疑わざれば進まず。**

の精神で、現在に満足することなく、思いやりに満ちた音楽都市を目指したいですね。

全国大会で指揮をとる鈴木さん（昭和39年）

## 音楽に接し続けられる受け皿を

**小針　智意子（ちいこ）さん**
郡山第二中学校合唱部顧問

**【紹介】**
小針先生は、音楽の伝統校「郡山二中」の合唱を指導し、3年連続日本一へと導きました。

私は、中学生時代に管弦楽に取り組んでいましたが、郡山二中は当時から演奏のレベルが高く、同じ中学生として、あこがれを抱くほどでした。

実際、3年前に郡山二中に赴任し、保護者や地域の方、そして教職員全体が音楽活動に深い理解を示してくださることに、たいへん感銘を受け、「これが長年伝統校として活躍している所以なのか」と感じました。

しかし、それは二中に限らず、郡山市全体に根づいており、音楽都市といわれるまでに努力された多くの先輩の先生方、そして音楽に対する市民の皆さんの熱意によって支えられてきたのだと思いました。

音楽の良さを理解し、音楽活動に関わってくださる方がたくさんいることで、音楽都市といわれるまでに発展してきたのだと思います。

指導者として関わってきた子どもたちが、卒業後も高校や大学、社会人となり、合唱を続けてくれることに喜びを感じます。彼らが必ずや、次世代の良き理解者になってくれるはずです。

生涯、音楽を続けられる受け皿づくり。それが「音楽都市こおりやま」の次なるステップになるのではないでしょうか。

生徒を指導する小針先生

# 音楽を通じた「おもてなし」の心で

**石橋　秀郎さん**
社団法人郡山青年会議所理事長

**【紹介】**
今年理事長となった石橋さんは、音楽都市をテーマとしたコンベンションによるまちづくりを目指しています。

郡山が音楽都市となったきっかけは、「東北のシカゴ」と称されたところにあり、そのイメージを払拭（ふっしょく）するため、演奏者や市民、行政が一体となって音楽によるまちづくりを進めたところに、私は今も感動を覚えます。

現在の郡山は、そうした先輩たちの努力で豊かになり、かつてのシカゴのイメージは、もうどこにもありません。

しかし、今の社会は本当に豊かなのでしょうか。ニュースでは、目を覆いたくなる事件が毎日流れ、子どもたちには、人を信じることよりも、疑うことを教えなければならない時代になっているのです。これは、戦後の荒廃よりもずっと深刻な心の問題なのではないでしょうか。

郡山での音楽都市づくりに向けた熱意は、物質的な豊かさの影で徐々に冷め、以前のように身近なものではなくなりました。

しかし、こうした時代だからこそ、みんなが一体となって進めた音楽によるまちづくりを思い出すべきではないでしょうか。

音楽をキーワードとしてまちづくりに取り組み、住む人の心を豊かにし、郡山に対する愛着と誇りを育（はぐく）みましょう。そして、自慢の音楽と豊かな心で、郡山を訪れた人をもてなし、「もう一度、あのまちへ」と思っていただけるまちにしましょう。

「響け！魂（こころ）のシンフォニー」

これは今年10月に開催するJC全国会員大会のスローガンです。おもてなしの心で、「音楽都市こおりやま」を全国に発信したいと思います。

まちのなかに音楽を！

## (社)日本青年会議所 第55回全国会員大会郡山大会

(期間) 10月5日㈭～8日㈰

次は郡山で！（2005全国会員大会姫路大会）

ひとづくり、まちづくり、人間力開発など、あらゆるプログラムが盛り込まれた国内最大のコンベンションを郡山で開催します。

約15,000人のＪＣメンバーなどが集まりますので、音楽都市の魅力を「おもてなしの心」で伝えます。

## 第11回 水と緑の全国音楽祭 ～全国トップレベルの合唱～

| | |
|---|---|
| 出演団体 | アンサンブルPVD（山梨県） |
| | カンタスアニメ（東京都） |
| | 郡山女子大学開成の杜女声合唱団 |
| | 福島県立安積黎明高等学校合唱団 |
| | 福島県立橘高等学校合唱団 |
| | 福島県立葵高等学校合唱団 |
| | 郡山市立郡山第一中学校合唱部 |
| | 郡山市立郡山第二中学校合唱部 |

今回は、世界的な合唱指揮者の藤井宏樹先生が特別ゲストで参加します。全国有数の感動あふれる美しい歌声をお楽しみください。

**日時**…３月５日㈰
午後１時30分開演

**会場**…市民文化センター大ホール

**入場料**…無料（入場整理券が必要です）

※入場整理券は文化課、市政情報センター、市内各公民館、市民文化センターで、２月５日㈰から配布します。

問文化課☎924－2661、
市民文化センター☎934－2288